

# 館報 Book Guide

高崎市八千代町二丁目4番1号  
群馬県立高崎高等学校  
図書館



閲覧・学習スペース



新書コーナー



文庫本コーナー



雑誌コーナー



吉野弘の詩

校長 小林智宏

やさしい心の持ち主は  
いつでもどこでも

われにもあらず受難者となる

(「夕焼け」より)

ほっそりした母の 胸の方まで 息苦しくふさいでいた白い僕の  
肉体 (「I was born」より)

生命は  
その中に欠如を抱き  
それを他者から満たしてもらうのだ (「生命は」より)

吉野弘は人の心の痛みや悲しみに寄り添いながら、生きていること  
の幸せやほのかな希望をやさしい言葉で語ります。

言葉の息遣いに最も鈍い者が  
詩歌の道を朗らかに怖さ知らずで歩んできた (「最も鈍い者が」より)

このように自身を振り返る彼は、詩を作りたくなるのは日常の  
ちよつとした気付きから物の見方が変わったたり深まったりする経験  
をしたときだといいますが、すぐ詩句が閃くのではなかったよう  
です。

「畢」、猶  
「華」の面影宿すかな

たった二行のこの詩は、「畢」というあまり使われない漢字に「華」  
の幻影を見て想像が膨らみ、「もう畢りですが、少し前までは華だっ  
たような気がしています」、「私は『畢』ですが、ひととき『華』だっ  
たこともあると無理にも思おうとしています」、「『畢』が、自分の中  
に『華』を探しています」、「自分の中に『華』のひとときがあった  
という思いを「畢」は捨て切れずにいます」、「『畢』の中に、『華』  
のようなものをチラと見るわびしさ」、「『畢』、やや『華』の面影残  
すかな」といった改作を重ねた末の作品です。その過程を、「詩をヒ  
ネっているときのモタつきぶり」と自著で紹介しています。  
努力家です。でもその努力が愉しみでもあったのでしょう。そん  
な彼ならではの名詩の数々。読むたび、日常に紛れて見失いがちな  
ことに気付かせてくれ、人として生きること励ましてくれます。

# 『病床と本』

教頭 田中 幸雄



朝夕の検温と血圧測定、主治医による検診と1日3回のリハビリ（理学療法・作業療法・言語聴覚療法）の時間を合計すると4時間になる。病院の夜は早いと云え、起きている時間からこれらの時間と食事や入浴の時間を引くと9時間が残る。入院しているのだから、大人しく療養に専念していればよいのだが、毎日のこの9時間にどう向き合うかが入院生活の大きな課題となった。TVをポットと眺めたり、スマホで音楽を聴いたり、廊下をひたすら歩いたり、いろいろ試してみたが、やはり最後は読書に行き着いた。初めのうちは、ネットで注文した本を家族に病院まで届けてもらった。最初の一冊は『自省録』（マルクス・アウレリウス、神谷美恵子訳）であった。哲学的で難解な部分もあるが、現代でも通用する珠玉の名言に出会うことがあり、久しぶりに人生の指針や教訓を読んだ本から体得で

きる貴重な機会になった。

書籍代がかさんでからは、読書を趣味にしている若い知人から、読み終えた比較的新しい単行本を一〇冊ほど見繕って届けてもらった。『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』（七月隆文）、『アイネクライネナハトムジーク』（伊坂幸太郎）、『流浪の月』（風良ゆう）、『こんなにも優しい、世界の終わりが来た』（市川拓司）：など、若い世代に人気のある作品で占められていた。純文学を読みこなすには、錆びついた感性の錆落としから始めなければと思っていたが、読み進めていくうちに作品の世界観に引き込まれ、一〇代の感性が甦ってきたような感覚になり、読後しばらくはその余韻に浸ることもできた。いくつかはすでに映画化されており、退院後にDVDを借りて原作をどのように映像化したのか、どんな役者を起用したのかを確かめながら鑑賞する楽しみも増えた。

読書に没頭しているときは、時間の経過を忘れる。多忙な毎日であったとしても、隙間の時間の本を手にする事で、自分の世界が広がる楽しみを得ることができると再確認できたのは、入院生活の思わぬ副産物である。

## 校内ビブリオバトル



去る九月二十六日月曜日、放課後の図書館では熱い舌戦が繰り広げられていた。総勢七名による書評合戦、ビブリオバトルである。

ビブリオバトルとは五分という短い時間で一冊の本を紹介する、読書家・本好きによるコミュニケーションの場だ。最終的には、発表参加者（バトラー）と観客が一番読みたくなった本、「チャンプ本」を決定する。

今回のチャンプ本には、大澤秀康さん（一年五組）の『死亡フラグがたちました！』（七尾与史）が選ばれた。各々が言葉

巧みにおすすめの本を紹介する中、終始落ち着いた態度で本の特徴を端的かつ面白く紹介する彼の弁論は聴衆の心を惹きつけた。他のバトラーも皆個性豊かでレベルの高いビブリオバトルとなった。

校内ビブリオバトルは来年も開催される。これを機会に読書家・本好きはもちろん、普段は本を読まない人もぜひ、おすすめの本とともに参加してもらいたい。

（二年 石田千陽）

## レコード鑑賞会

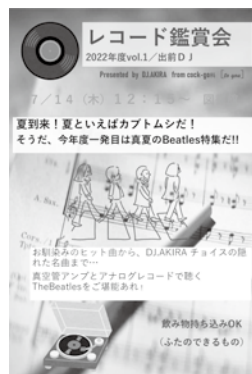
今年度も、レコード鑑賞会が開催された。デビュー五十周年を記念した『YUMING』と松任谷（荒井）由実特集や、特別ゲストとして『UEZU KA』こと飯塚先生を招いた『サイモン&ガーファンクル クリスマス直前緊急DJ』など個性豊かなラインナップで図書室は超満員となった。

レコード鑑賞会を通じて知った名曲は多い。普段はなかなか聞かない曲や新たな音楽の世界に出会える、そんな機会だと思う。私個人として言えばサイモン&ガーファンクルについては殆ど知らなかったし、レコード鑑賞会がなければ出会っていなかっただろう。特に『サウンド・オブ・サイレンス』の透き通るような曲調がとて好きだ。

ストーリーミング配信などいつでも気軽に音楽が聴けるようになった現代、しかし音楽と向き合って「聴く」というか「味わう」というか、そういう機会が少なくなってきた気がする。音楽が「消費」されている、



校内ビブリオ大会で優勝した1年大澤秀康君が、ビブリオバトル県大会に出場しました。



と思う。そんな中で敢えてレコードで音楽を聴くということは非日常的で、忘れていた大切なものを思い出させてくれるような気がする。日々の課題や忙しさをふっと忘れて音楽を「聴き」に来てみてはいかがだろうか。

(二年 畔上晃太郎)

### 県立図書館 ボランティア体験

私は今年度の夏休み期間中に前橋市にある県立図書館でボランティア活動を行ってきました。応募した理由としては、2年生、3年生になるにつれ部活にも受験勉強にも、より一層時間をかけていく必要があり、時間に余裕のある1年生の時に様々な物事に触れて見聞を広めておきたいと考えたからです。では、私が経験してきたボランティア活動の内容を紹介しましょう。まず、はじめにボランティア発足式及び研修会が執り行われ、館長から「ぐんまちゃんエプロン」と名札を受け取りました。また、活動の際の心構えや基本的な図書の分類、ビブリオバトル、POPづくりの工夫についての説明を受けました。その後、館内見学に移ったのですが、とにかく蔵書の数の多さに驚きと興奮でいっぱいでした。普段立ち入ることができない裏側の、膨大な量の本が収納されている書庫に入らせていただきたい、十六世紀の超年代物の聖

書とご対面させていただいたりと…と非常にワクワクする体験ができました。また案内をしてくれた図書館の方と、地域の方が互いに和気あいあいと挨拶やお話をされる姿に、図書館が地域の人と強く結びついていてることを実感しました。館内見学が終わると次は一般図書の配架実習・整理等に移りました。請求記号を確認して「日本十進分類法」に基づき正しく書棚に並べるのは単純な作業の繰り返しでしたが、慣れるまでは大変でした。また配架作業等に加え、カウンター作業にも取り組みました。利用者の方から質問されることもあり、緊張感の中にやりがいもありました。そして次は事務補助作業(地域協力係)。この作業は意外に力作業で驚いていた人も多く、ボランティア活動に参加しなければ知り得ませんでした。県立図書館が、市町村立図書館やそれらを持つことができないう町村、さらには学校への支援を行っていることも、身をもって知ることができた良い時間でした。

これらの体験の他、ビブリオバトル体験会やPOP作成などを通して多様な本と多様な人と出会うことができ、とても刺激のある(本が読みたくなる)ボランティア活動となりました。最後にありますが(校内ビ

(二年 大澤秀康)

- 第3回センバツ!  
高校生即吟俳句選手権  
●入賞 3年 吉野 貴翔  
第1ラウンド  
猫じやらし
- 第2ラウンド  
たゆたひ湯切りする男  
「工学」を  
素読してをり秋暑し
- 第3ラウンド  
半額の弁当買えば虫の夜  
準決勝  
意地悪と  
言はれて秋の虹の赤
- 特別賞 1年 香川 直寛  
立て看の  
濁点薄れ猫じやらし
- 第25回  
全国高校俳句選手権大会  
地方大会 前橋会場第一会場  
●最優秀句 2年 金澤 英明  
霞から戻りし鳥の重さかな
- 第25回  
全国高校俳句選手権大会  
全国大会
- 入賞 3年 山岸 春貴  
七月や背中の長きバスタオル
- 文学賞 2年 白石想一郎  
「年月」
- 優秀賞 1年 香川 直寛  
「地面」
- 優良賞 3年 吉野 貴翔  
「すてきないきもの」
- 短歌部門  
●優良賞 3年 吉野 貴翔  
あなたには気づかないふりする駅の二番ホームへ  
下る階段
- 俳句部門  
●文学賞 3年 吉野 貴翔  
天麩羅に  
なりかけて浮く路のとう
- 優秀賞 3年 山岸 春貴  
春泥や夜中にゆるる給湯器
- 文芸部誌部門  
●優良賞 「翠巒十五号」

高崎高校 読書感想文コンクール  
令和四年度『群青』大賞

## 「老人と海」を読んで

二年 高田 知



常にスマートフォンを傍らに置き、便利だが無機物に囲まれた生活をしていると、自然の中の悠々とした生活に憧れる。きつと、どれだけ文明が進んでも、人間の心は自然を求めているのだと思う。思いつめた人間が海へ行き、自分の小ささを実感するなんて話はよくあるし、コロナ禍に際して地方に移住して大自然に囲まれた中でリモートワークなんて言う話もよく聞く。この本はそんな自然と真摯に向き合う姿が鮮明に描かれている。

「海をきれいに」などと謳われているポスターやCMをよく見かける。また、大気汚染や地球

温暖化といったワードを聞かない日はないだろう。そういった意味では環境問題は非常に身近な問題になっている。しかし、どれだけ多くの人がその問題を自身事として真剣に考えられているだろうか。「海をきれいに」というCMを見て、心の底から、綺麗な海を守りたいと思えなければ、真に環境問題が解決されることはないのではないだろうか。私たちは今、自然のすばらしさを再確認する必要があると思う。生き物はみな友達なんて言うが、この小説では、海の生き物に老人が言葉を投げかけている描写がいくつもある。老人は海の生き物たちと対等な態度で接している。そうした生き物へのリスペクトは私たちが忘れてはいけないものの一つだと思う。さらに、老人は海をスペイン語の女性形、ラ・マールと呼び、深く愛していた。それは、海はその恵みも禍いもみんなまとめて私

たちに与えるからだ。私たちが魚を食べるほとんどの場合は、魚は捌かれ、皿に乗っている状態である。自分で魚を捕りに行き食べることは普通ない。だからそのありがたみや、尊さに疎くなってしまふ。いのちをいただくというのは、本来、老人が命を削りカジキと戦ったように、自分の命とその動物の命を同じ線上に置くということなのだと思ふ。

老人の戦いはそれを感じさせる確かな迫力があつた。老人はカジキとの戦いの中で「こうなったらどっちがどっちを殺そうと同じこつた。」と言う。まさに一心同体、二つの命は等しく存在している。そんな生き物たちを私たちが人間が、一方的に追いつめていいはずがない。人間だけが偉い理由が一体どこにあるのか。広大な海、自然の中で私たちは平等だ。

メに襲われた際も、常に心を燃やし戦い続けた。「人間つてやつは、負けるようにはできちゃいない。」

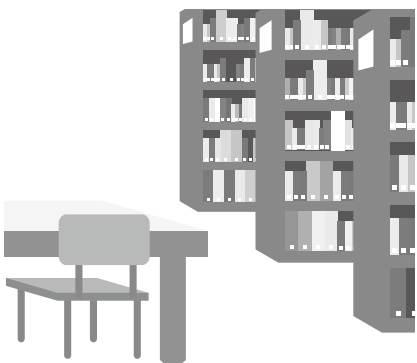
「叩きつぶされることはあつても、負けやせん。」

広い海にたった一人で挑むその覚悟には、読んでいて胸を熱くさせられた。その姿は、まさしく人間の強さであつた。こうした人間のあるがままの姿を映し出してくれることもまた、海の、自然のすばらしさだと思う。

また、老人は海の上でたくさんの独り言をこぼす。自然と向き合い、孤独でいる時間は、人に考える機会を与えらると思う。普段気に留めないようなことも、自然の中では敏感に感じられる。それはやはり、ビルに囲まれた土地で生活していても、決して体験できないことだと思う。老人はあまり深く考えることをよしとしなかったが、自分と向き合うには自然の中が一番だと思ふ。

ここまで、私が「老人と海」を読んで思った、自然のすばらしさについて考えてきたが、やはり自然には、私たちがスマートフォンの中を眺めているだけでは感じられない魅力が詰まっていると思う。初めに自然のすばらしさを理解しないでは真の環境問題の解決には至らないのではないかと考えたが、本来、それは、私が様々な経験を重ねるうちに感じ、環境への意識が深まってゆき、はじめて言えることなのだと思う。しかし今回、こうして本を読み、他人の人生を、世界を、疑似体験することができた。実際に体験でもそうでなくても、なにかが心を動かしたならば、そこには大きな意味があると思う。

老人のライオンの夢のような、臆気で不確かなものであつたとしても、何かがその人の中に残ればよいのだと思う。「老人と海」という作品は、私の中に確かな爪痕を残してくれた。



## 「アルジャーノンに花束を」を読んで

二年 千葉陽希



い、孤独さや悩みを抱えてしまふ。最終的には手術の副作用によつて以前より更に知能が低下するのだが、彼自身は全く気にしておらずむしろ満足している。

もしも手術を受けるだけで頭が良くなれたら。日夜机に向かい課題と格闘している我々とつて、こんな夢のようなことはない。学生でなくても諸手を挙げて歓迎するだろう。しかし本当にそれは喜ばしいことなのだろうか。知性が高がるにつれ、何かしら問題も起こってくるかもしれない。

「アルジャーノンに花束を」は、白痴の青人チャーリーと白ネズミのアルジャーノンが脳外科手術を受け、超頭脳を手に入れるところから始まる。チャーリーは常人を遥かに凌ぐ頭脳を手に入れるが、それ故に周囲の人々と確執を抱えたり、自ら距離を空けるようになってしま

この話で印象的なことは、次のチャーリーのセリフである

「人間の愛情の裏打ちのない知能や教育なんてなんの値打ちもないってことをです。」  
 何とも皮肉なことではないだろうか。白痴であった頃の彼は母親から厳しくしつけられ、働いていたパン屋の同僚からも馬鹿にされていた。彼は賢くなりさえすれば喜んでもらえるし、同僚とも仲良くなれると夢見ていたのだ。しかし実際は賢くなつた彼を周囲の人々は疎み、追放してしまふのである。これは現代社会の考え方にも一石を投じるものであろう。資本主義化が進んでいくにつれて、人々の中には数式やら単語といった実践的な知しか残らなくなつてき

た。チャーリーはそういつた知識については比肩できる者がいない程優れていた。しかし彼は精神的成長をしきつておらず、他人を理解したり、歩み寄りこ

とができなかつた。いざれ私たちもそうなつてしまふのではないだろうか。感性や情愛を理解せず育つた子供の末路は、チャーリーなのかもしれない。もう一つこの話には非常に参考になるエピソードがある。それはチャーリーが憤慨していることだが、手術前の彼が人間として扱われていないことである。ニーマー教授は実験結果で彼に「社会のお荷物」という表現を用い、あたかも実験動物のように説明したのである。私も無意識に彼らのことを嘲つていたのではないだろうか。たとえ精神や知性が発達しきつていなくても彼らは人間であり、私たちと同じように生きて、考え、感じてゐる。何故そんな彼らをはみ出し者にするのかという

と、やはり資本主義の一つの影響かもしれない。資本主義においてはどれだけ個人で仕事に貢献できるか、それが価値基準となつてゐる。その判定に基づけ

ば確かに彼らは優秀とは言えない。しかしそもそもその基準が間違つてゐるのではないだろうか。この本を通してそう考えるようになった。

私は中学校の頃から、テストで良い点を取ること、高い順位を保持することに躍起になつてゐた。必要な情報の判断基準はテストに出るか否かであり、また順位という結果だけを重視し、それより深くは考慮に含めなかつた。その当時の私のことを振り返ってみると常に空虚さを感じており、日々をただ無心で送つていたように思える。まさに知識が服を着ているものであろうか。

では、どのようにこういった虚しさをくい止めればよいのだろうか。私はその答えは花束を持つことであると思う。花束というのは通常自分以外の他人に贈るために購入するのが一般的である。つまり人と関わり、感情を交わし合う環境になければ、花束というものは中々縁遠いものではないだろうか。この本のタイトルにもなつてゐるように、知性を失つたチャーリーはアルジャーノンの墓に花

束を供えるよう手紙でお願いしている。他人との交流を積極的に行い、お互いに友情や情愛を育んでいく。そういった花束を買う環境に常にありたいものだと思う。

また最後にチャーリーは知性があつた時にはあれほど忌み嫌つてゐたにも関わらず、他人に笑わせておけば友達は何れも、これから友達をたくさんつくりたいと述べてゐる。知性がないが故のその純粹でまっすぐな言葉は我々の心を打つし、かつて前向きになつた彼の考え方をたいへん見事に表現しているものである。つまり我々に強い環境を与えたり人生を前向きに生きていくためには知性は必要なのである。生活のためにはもちろんないと困るが、必要以上に教養や知識を求めてしまいがちなこの現代社会について、改めて考え直す時が来てゐるのではないだろうか。



# いざ！高高図書館へ

高崎高校図書館では、株式会社カーリルの「COVID-19 学校図書館支援プログラム」を活用した本の検索サービスと連携しています。インターネットに接続できる環境であれば、どこからでも本校図書館の本を検索することができます。

図書館の classroom も開設しています。登録して新着情報をチェックしてください！

## 図書館蔵書検索



<https://private.calil.jp/gk-2003900-c6f9n/>

## 高高図書館 classroom



クラスコード  
cfgbcm3

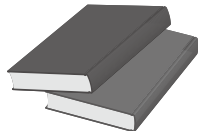
<https://classroom.google.com/c/MjkyNDQ2NTQwNjcx>

## 図書館利用の 奥義

**開館時間** 9:00 ~ 16:50  
**休館日** 学校がお休みの日  
(長期休業中の開館日は別途連絡)

### 施設・設備

■蔵書数 約 40,000 冊



■雑誌『Newton』『日経サイエンス』『AERA』『世界』『ダ・ヴィンチ』『ニュータイプ』『FINEBOYS』『Sound&Recording マガジン』  
(バックナンバーは一夜貸出します)

### ■新聞

当日のものは上毛新聞が閲覧できます。  
朝日・読売・毎日・日経・産経・東京 (一日遅れ)

## ①本を借りよう

**10冊まで3週間  
借りられます**

面倒な手続きなし。借りたい本を持って  
カウンターで学籍番号を伝えるだけで OK

- ★ 保護者の方も生徒さんを通して利用できます。
- ★ 卒業生も、連絡をいただければ利用できます。

## ②リクエスト・予約しよう

読みたい本が図書館にない…

↳ **リクエスト**

公共図書館から取り寄せも可能。  
高崎高校 HP にフォームを掲載。  
館内にリクエストカードもあります



読みたい本が貸出中…

↳ **予約**

返却されたら優先して借りられるようにお取り置き  
します。カウンターで申込みを！

## ③相談しよう

調べるために必要な本を知りたい。  
探している本が見つからない…

**そんな時は司書に Let's 相談！**

高崎高校HPに掲載しているレファレンス申込書を使えば  
メールでも OK。

<https://takasaki-hs.gsn.ed.jp/wysiwyg/file/download/13/820>



# 図書館を使い倒せ!

キレイで本も充実している市立図書館が学校から近い…

そんな恵まれた環境にある高高ですが、校内にも図書館があるのを忘れていませんか? 地味な場所ですが、みなさんの学校生活のお役に立てるよう運営しています。3年間、思う存分使い倒してください!

## 進路実現・探求学習を応援!



**「進路コーナー」**  
キャリア学習、大学選び、学習法  
など進路実現をサポート



**「SSHコーナー」**  
探求学習に役立つ  
科学分野の本

## 「知りたい」「読みたい」を応援!



伝統を感じる  
豊富な蔵書



高高OBの著書を  
集めた「翠巒文書」



洋書  
英語多読用図書

## 忙しい毎日にちょっと一息…を応援!



期間限定  
高高神社



クリスマス  
コーナー

読書週間に図書委員が  
作成した POP



# 図書委員会による さまざまな新企画

## ◆POP・黒板アートの作成

2022年、図書館では様々な活動を行ってきました。その中の一つとして、図書委員によるPOPの作成がありました。各々が薦める本のPOPを作成し、図書館の入口に飾られました。また、図書館の内外での装飾活動も盛んに行われました。



## ◆読書週間

(借り放題・付録抽選会)

十月二十四日(月)～十一月十一日(金)には高崎高校読書週間が設けられ、生徒の読書を促す様々な企画が催されました。この期間中は、図書館の本が何冊でも借り放題になり、多くの人が本を借りている様子が見受けられました。また、本を借りた人を対象に雑誌のバックナンバーのプレゼントや雑誌の付録抽選会が行われ、これもまた生徒の読書促進に一役買いました。この期間をきっかけに読書が好きになった人も多々あります。

## ◆学級文庫の設置

また、その他の活動として学級文庫の設置があります。図書委員が自分のクラスに向けて本を十冊ほど選び、それをクラスに置きました。普段は本を読んでいる生徒の、学級文庫を読む姿が見られ、本を選んだ側からしても嬉しく感じるとともに、本に触れる機会を作り出すことの大切さを実感しました。

## ◆「読みぐすり」フェア

また、「読みぐすり」という企画も行われました。「読みぐすり」とは、本を選ぶところから楽しんでもらい、なおかつ、普段から自分で選ばないような未知の作品へ手を伸ばしてもらおうためのブックフェアで、書店で行われていたものを参考にして高崎高校図書館でも行いました。珍しさもあり多くの人に興味を持ってもらいました。この期間中は連日図書館への来客が絶えることなく、「読みぐすり」を借りた人の笑顔も見られました。



## 読書のすすめ

突然ですが皆さん本の起源は知っていますか？  
本が初めて作られたのは1450年ごろ、ドイツのヨハネス・グーテンベルグが活字・活版印刷術を発明したことが始まりと言われていました。本の発明は人々に正しい情報知識を伝え、後のルネッサンスに大きな影響を与えたと言われています。約六百年前から読書という文化は続いているわけですね。それも読書の有用性が強いからではないかと思えます。読書することで感動、驚き、気づきなど様々なものが得られると思えます。もちろん、長文慣れしたり漢字に強くなったり、勉強の合間のリラクゼーションにも使うことができます。皆さんにもたくさん読書をしてその楽しさを知って欲しいと思います。

(二年 齋藤 蓮)

## 編集後記

今年度は司書として新たに小宮山先生が就任され、新体制で始まった高崎高校図書室。各季節ごとのイベントや学級文庫の設置など初めての取り組みも多く、変化の年度であったと思う。withコロナの時代の中で新たな「日常」が定着してきた今、改めて図書室が高々生徒の憩いの場になることを願う。

今回の図書館報を発行するにあたって関わってくださった皆様様に心から感謝申し上げます。

(二年 石田太一)